2022-2-28　(改１)2022-3-25

画家ヤン・ファン・エイクの先進性について～その６：絵画・まとめ１～

山本雅晴

Ⅰ、前報に続いてヤン・ファン・エイクの絵画の先進性について作品「最後の審判」などについて記述する。

１．「キリストの磔刑」と「最後の審判」 1440～41 年、メトロポリタン美術館 2010-11-23 鑑賞

本作品は制作年や三連祭壇画の両翼かディプティク（二連画）なのか、画家はファン・エイクか他の画家の手が入っているのかなど議論されており結論には至っていない点がある。最近の情報ではファン・エイクの遺作の作品の一つで、「最後の審判」の上部はファン・エイクの下絵をもとに工房の助手の手で完成されたという見解が支配的ではあるが、まだいろいろ議論されている。

図１「キリストの磔刑」と「最後の審判」

この絵画は先進性や斬新な表現で埋め尽くされているといっても過言ではない。とてもこれらを解説する能力がないので、参考資料として A.ウィキペディアの「キリスト磔刑と最後の審判」と B.メトロポリタン美術館の “The Crucifixion ; The Last Judgement”を読んでいただきたい。

上記 A.の資料に記述されている中で興味深い２，３の点について、ふれることにする。

① ヤン・ファン・エイクが 1426 年アルプスを越えてイタリアを訪れるときに、**「キリスト磔刑」の背景のような雪を被った山並みを描いた**作品がある。・・・どの作品なのか確認できていない！ 先に記述した本シリーズ 1 の表 1 の **1426** 年の項で「善良公の命により **2 度の秘密の旅行**に出かけた」とあり、この中にイタリア旅行が含まれていた可能性がある。しかし、1426 年 9 月 18 日に兄フーベルトが死去している。兄の死去の前にイタリアに行ったのか、後に行ったのかわからない。いずれにせよ時間的にゆとりのない旅であったろう。当時ヘントから片道 1500Km 以上離れたイタリアにアルプス越で旅行するには少なくとも 3 ヶ月以上はかかると思われる。中世のアルプス越のルートとして、ヘントからはやや遠くなるが、一般的にはインスブルックからアルプス東部の**ブレンナー峠（標高 1375m）**越でヴェローナ方面に行く。エイクの約 7 0 年後の 1494 年にアルブレヒト・デユーラー（1471～1528）はアウスブルグからこのルートでイタリアを訪問している。このルートで行くとパドヴァのジョット「スクロヴェニー礼拝堂」のフレスコ画を見ているに違いない！ヴェネツィアも近い。もちろん、フィレンツェは訪れたであろうが、シエナ、ピサ、ローマまで訪れる時間はなかったか？ フィレンツェでイタリアの初期ルネサンスの革新的画家マザッチョ（1401～1428）の「貢の銭」や「聖三位一体」は見ているだろう。あわよくばマザッチョ本人との遭遇のチャンスがあったかも？

ブルゴーニュ公国はイタリアの有名貴族と人的交流や情報交換を行っていた。例えば、以前にも言及したイタリアのルッカ出身でブルゴーニュ公国に出仕していたアルノルフィーニやフェッラーラの名門の公爵家のデステ家の非嫡出子を軍人として雇入れている。(MET 美術館のウエイデンの肖像画「フランチェスコ・デステ」1460)。ファン・エイク（1426 年）やファン・デル・ウェイデン（1450 年）のイタリア訪問にはこのような伝手を有効に活用したと思われる。

ファン・エイクのイタリア訪問が画家の作品にどのような影響を及ぼしたのか具体的には指摘できない！兄フーベルトの構想で進めていた「ヘントの祭壇画」はあまり影響を受けていないかもしれない。油彩画技術などで先行しており、むしろイタリアより進んでいると確信し自信をもって完成させたのかもしれない。

② 「最後の審判」の下部の写実的でオドロオドロしい地獄絵図：奇想天外、妖怪の出没する絵は後のヒエロニムス・ボス（1450～1516）やピーテル・ブリューゲル（1626～1669）が有名だが、写実的な迫力はファン・エイクが勝っており、後の彼らはファン・エイクのこの絵を見ていたに違いない！もっともこの絵は個人用のミニアチュールのようで、微細描写で教会や礼拝堂などの広い場所では見えにくい。メトロポリタン美術館で見た記憶はあるが内容は把握できていなかった。４K や８K の高精細 TV 撮影で拡大し説明を聞いて初めて理解できた。ファン・エイクの絵は、ウィキペディアなどに記載されている中の高精細な画像を選んで拡大してゆっくり鑑賞してください！

③ 宗教画の地獄表現について

仏教、キリスト教、イスラム教などにおける地獄や天国の表現はよく似ているといわれている。これらの宗教は、それ以前に存在していたゾロアースタ教（拝火教ともいう）の二元思想の影響を受けて派生したためといわれている。宗教に入ることを勧める上で地獄と天国の二者択一の論理で勧誘することはやり易い！

④ 「最後の審判」の代表的な絵画：下の表 1 に示す。　　**表 1　「最後の審判」の代表的な絵画**

No.	場　　所	画　家　名	制作年	材 料 名	寸　法	鑑 賞 日
1	サンジョヴァンニ洗礼堂	コッポ・マルコヴァルド	1275	モザイク	?	1999/3/17
2	スクロヴェーニ礼拝堂	ジョット・ボンドーネ	1306	フレスコ	1000 x 840	1999/3/16
3	サン・マルコ美術館	フラ・アンジェリコ	1431	フレスコ	105 x 210	
4	メトロポリタン美術館	ヤン・ファン・エイク	1440	油彩/板→キャンバス	56.5 x 19.7	2010/11/23
5	オスピス・ド・ボーヌ	ファン・デル・ウェイデン	1450	油彩/板	220 x 546	
6	グダニスク国立美術館	ハンス・メムリンク	1473	油彩/板	224 x 381	
7	システィーナ礼拝堂	ミケランジェロ	1541	フレスコ	1370 x 1220	1999/3/15
8	アルテ・ピナコテーク	ピーテル・ルーベンス	1617	油彩/キャンバス	609 x 464	2012/10/16

9	テート・ブリテン	ジョン・マーティン	1853	油彩/キャンバス	197 x 326	2011/11/23

2．ヤン・ファン・エイクの絵画の所蔵者の変遷とエルミタージュ美術館所蔵美術品の売却！

名画は万人が手に入れたがるため、数奇な運命に見舞われることが多い。特に、ヤン・ファン・エイクの絵画は点数も少なく、コンパクトで貴重な作品ばかりで盗難にもあいやすい。大作の「ヘントの祭壇画」は幾多の災難を乗り越えて鮮明な画像が保持されている。詳細はウィキペディアの「ヘントの祭壇画」を参照ください。

ここでは、先に紹介した現在はメトロポリタン美術館所蔵「キリスト磔刑」・「最後の審判」とワシントン NG「受胎告知」の所蔵者の変遷に付いて紹介する。

① メトロポリタン美術館所蔵「キリスト磔刑」・「最後の審判」
すでに説明したように 1440～41 年にファン・エイクが描き、1441 年に死去した後、工房の助手が 1443 年頃に完成させた。以後 1840 年まで来歴不明。作品が小型で個人的な祈祷用として制作された。
1814～21 年頃：ロシアの外交官ディミトリー・タチシェチェフがマドリードかブルゴス近郊の修道院から購入し 1845 年に本人死去の際、ロシア皇帝ニコライ 1 世に遺贈し、1917 年にエルミタージュ美術館に収められた。1917 年のロシア革命後ソヴィエト政府が、財政難から 1931 年にエルミタージュ美術館の高額で換金可能な美術品リストを作成し秘かに売却を試みた。NY の画廊ノードラー商会が価格交渉し売却希望額の 60 万ドルを大幅に下回る 18.5 万ドルで購入し、1933 年にメトロポリタン美術館に売却した。

② ワシントン・ナショナル・ギャラリー「受胎告知」：図 2 に示した。
「エルミタージュ美術館所蔵美術品の売却」は下記資料に記載。
ウィキペディア「ソ連政府のエルミタージュ美術品売却」やエルミタージュ美術館から 2001 年に発刊した「エルミタージュ～建物とコレクションの歴史～」日本語版 P.188 。この内容を要約すると：
・1920 年代後半、工業化を急速に進めたため財政が逼迫し外貨が必要だった。このため金持ちや教会から宝石やイコンなどを没収し売却していた。これだけでは足りず、エルミタージュやロシア美術館の即金化できる高額美術品のリストを作成させ秘かに売却を始めた。(1928 年)
・この情報をいち早く察知し購入したのはイラク石油会社創始者のグルベンキアンが 1930 年初めにレンブラントやルーベンスなどの名画を石油と引き換えに入手した。
・A.メロンは米国の銀行家の富豪で、3 代に亘る大統領の財務長官を務め、美術品の収集家で、当時駐英大使でロンドンにいた。ロンドン NG を手本に、米国にも国立美術館創立を考えていた。親しい NY の画廊のノードラー商会からエルミタージュ美術館の美術品販売の情報を得た。優先購入のためノードラー商会とコンソーシアムを組み 1930～31 年でファン・エイク「受胎告知」、ラファエロ「アルバの聖母」,「ゲルギオスとドラゴン」、ティッツアーノ「鏡を見るヴィーナス」など 21 点を 665.4 万ドルで購入した。1937 年、A.メロンは 21 点の絵画をワシントン NG の建設資金とともに米国政府に寄付した。
図 2 のファン・エイク「受胎告知」は三連祭壇画の片翼で 1791 年まで三連でディジョンのシャンモル修道院、フランス革命時に消失→1850 年

図 3「アルバの聖母」,約 117 万＄

ロシア・ニコライ 1 世→エルミタージュ美術館→1931 年に A.メロンへ。